

F-11 並存する宗教

709. 隣合うモスクと教会

ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教が世界の4大宗教である。この世界の4大宗教が全部そろって共存しているのが、インドネシアである。

首都ジャカルタのムルデカ広場(→158)に隣接して《カトリック大聖堂》と《中央モスク》がある。教会はオランダ植民地時代の由緒ありげな建物であり、一方モスクは独立後に国費で建設された巨大な建物である。モスクの玄関の位置が道路に対しズレているのには訳がある。礼拝はキブラ(→810)に向かわなければならないので、入り口から奥に向かう方向が決まってくるからである。

異なる宗教のその国における中心の建物が一枚の写真に入る位置にあることはインドネシアの宗教事情を雄弁に物語っている。宗教の寛容が言うべくしてどれほど難しいかは世界の紛糾する民族問題≒宗教問題であることから明らかであろう。

インドネシアは9割近くがイスラム教徒であるにもかかわらず世俗国家として独立した。宗教の自由は憲法で保証されている。ただし公認宗教はイスラム教徒、プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー教、仏教の5宗教に限られていた。

ジャワ人のクバティナン(→707)は宗教でなく信仰として認められている。政治的決着であるから宗教と信仰と何が異なるかはインドネシア人にもよく分からない。中国の儒教や道教は認められていなかったが、インドネシアが経済復興のため華人の要望を取り入れざるをえなくなり、2005年に儒教が公認された。

インドネシアの歴史を検証するに宗教対立をめぐる殺戮はなかったのではないか。あっても規模は小さかった。プランバナンの遺跡(→128)に見るようにヒンドゥー教と仏教も共存していた。

16世紀以降、イスラム教が列島を席卷した際もイスラム教はヒンドゥー教を完全に壊滅したわけでない。ヒンドゥー文化を吸収する形でイスラム教自体が変質した。どうしてもイスラム教に馴染めないヒンドゥー教ゆかりの人はバリ島へ逃げただけである。

湿潤アジアは多神教の懐であり、重層信仰(→695)として古い信仰の上に新しい信仰を受け入れた。このインドネシアで宗教の名において殺戮が行うようになったのは排他的一神教の影響が強くなりだして以降でないだろうか。

9月30日事件の50万人殺戮(→386)は無神論の共産主義者の抹殺という大義名分のもとにイスラム教徒が扇動された。スハルト体制崩壊後、イスラム教とキリスト教の宗教対立が各地で勃発し、インドネシアの統一をも揺るがしかねない問題になった。イスラム過激派(→751ex)の台頭などイスラム主義の動向が注目される。

710. 祝日の割り振り

宗教間の調和を図るためインドネシア政府は主要宗教の祝祭日を万遍なく採用し全国民の祭日として受け入れている。近代国家が宗教から中立であるために祝日から宗教を排除する日本流もあれば、公認宗教

を全部入れるというインドネシア流もある。

イスラム教は「イスラム暦」、ヒンドゥー教は「サカ暦」と暦が別であるから、年々の祝日は太陽暦の日付けとはズレが生じる。キリスト教もクリスマスだけが太陽暦である。

国は各々の宗教を超越した存在として国の祝日を太陽暦で公布する。その中でもインドネシアが最も盛大に祝う8月17日の独立記念日は宗教を越えた祝日である。インドネシアの公式の暦である太陽暦を定着させるねらいもありそうである。おおげさに言うならば暦を定める行為は天に代る者のみがなしうることであろう。

多民族国家、多宗教国家では休日は宗教がからむため非常にセンシティブな問題である。ワヒド大統領(→411)になって新たに「中国正月(陰暦イムレック=Imlek)」が国民の休日に認められた。中国系財界人の申し出を大統領が受けたことによる。

ワヒド大統領の思い付きのような休日の決定であったが、メガワティ政権によって2002年から中国正月がインドネシアの休日として宗教大臣によって公布された。イムレックを祝う人には公式の休日であるという歯切れの悪い説明であり、実際に休日する企業などは限られており中途半端な休日であったが、2005年からは正規の扱いになった。

中国正月とは旧暦(太陰暦)による正月であり、新暦より約1ヶ月遅れる。中国人は新暦を採用しても正月は旧暦を春節祭りとして墨守している。中国本土を問わず台湾、香港、シンガポール等東南アジアの華人にとって最大のお祭り¹である。

日本人は新暦を採用後は正月は新暦によるものとしたが、公式の正月行事は新暦であるが、民間ではその切替は緩慢であった。ひな祭り、端午の節句、七夕、お盆などは旧暦に合わせるため月遅れである。

以前はインドネシアの中国系住民は静かに家の中で自分等の正月を祝っていた。ここで国民の休日にオーソライズされたからといって華人が爆竹を鳴らし獅子舞や竜舞が繰り出しプリブミが見物に訪れて賑やかになることが期待される。しかし一方では華人のオーバープレゼンスに反発が生じ民族紛争の火種になるとの杞憂²もある。

休日ではないが国の公式の記念日には次のようなものがある。

- *カルティニの日(→342)4月21日
- *民族覚醒の日(→286)5月20日
- *パンチャシラの日(→366)10月1日 or 6月1日
- *青年の盟の日(→292)10月28日
- *英雄の日・スラバヤ戦争(→321)11月10日

711. 多様なイスラム教

16世紀、イスラム教はアラビアやインドの商人とともにインドネシアにやってきた。アラビアの苛酷な自然の砂漠で生まれた宗教であり²、厳しい戒律を自らに課したイスラム教は行動基準が明確であった。世界宗教に

¹ 神戸の南京町、横浜の中華街においても春節祭は地域の盛大なお祭であり、観光客の集まるイベントである。

² <編者註>よく研究してみると都会・商業社会の決まりであることがわかる。

値するほどの思索的深遠に裏付けされた哲学があるように思えないが、誰にでも分かる普遍性があった。

インドネシアへのイスラム教の布教は「スーフイズム(Sufism)」というイスラムの中の神秘主義の一派であったことはインドネシアの各民族に共通する気質とあいまってこの地におけるイスラム教の浸透を容易にした。

しかしこの〈乾燥〉地帯の宗教がインド洋を渡り東南アジアの島々に辿りついた際には風土の然らしむ〈湿润〉の影響を免れえなかった。イスラム教が上陸し農民にまで波及したのは土着のアニミズム信仰(→696)を排除せずに、むしろ妥協して行ったからである。このためにはイスラム教が、本来、偶像として拒絶しているようなワヤン(→904)も黙認されたのみならず布教の手段として活用された。

この結果、インドネシアのイスラム教はアラビアの砂漠の本家から見ると、かなり変質したものであろう。さらにインドネシアの国内においてもイスラム教と各民族の係わりあいには多様である。スマトラ島の西北端のアチエ人(→604)は最も早くイスラム化したという歴史的事情、メッカに最も近いという地理的事実もあり、敬虔なイスラム教徒である。ミナンカバウ人(→609)、ブギス人(→615)、スンダ人(→612)、マドゥラ人(→614)も熱心なムスリムである。

これらの民族と対称的なのがジャワ人である。ジャワ人には日本人が仏教徒である、という程度のイスラム教徒が圧倒的である。そのジャワ人の中でも社会階層によってイスラム教徒への態度が異なるというギアツの調査研究報告(→628)がある。

何れにしろインドネシア人の 87%がイスラム教である。ということは2億人弱のイスラム教徒で、改めて聞くといささか驚きの感じもあるが世界最多のイスラム教徒の国である。

それにもかかわらず政治勢力としてのイスラム教は独立前からインドネシアの“国体”を巡って D-5 章の複雑な経緯のもとに今日に至っている。スハルト大統領の強権体制が崩壊後、イスラム教に基づく政党が雨後の竹の子のように現れ、世俗国家を認めるイスラム教政党 NU を率いるワヒド(→411)が 1999 年、大統領の座を手に入れた。インドネシアのイスラム教の多様性は政党においても多様であり、インドネシア統一のイスラム勢力となりえないところがインドネシアのイスラム教である。

インドネシアに限らずイスラム教自体が多様であり、その宗派の対立は抜き差しならぬものがあることは中東の政治情勢からも明らかである。イスラム教のグローバル化によりインドネシアのイスラムも世界潮流の中のイスラムに大きく影響されるようになった。政治的には何を起さるか分からないという予断を許さない存在である。

⇒408.イスラム政党の復活

712. 開祖ワリ・ソゴ

15 世紀の初め頃、イスラム教がジャワにもたらされて以来、急速に広まった。「ワリ・ソゴ(Walisongo)」といわれる九聖人がジャワへのイスラム教の布教に貢献した人として崇拜される。いずれも 15 世紀末から 16 世紀始めの实在の人物である。イスラム神秘主義聖者の教団の主要メンバーである。9名を列記すると下記のとおりである。

	<p>「マウラナ・マリク・イブラヒム(Maulana Malik Ibrahim)」別名スナン・グレシック(Sunan Gresik)は生粋のジャワ人でない、ペルシアかトルコの出身である³。最初にジャワにイスラム教をもたらした人であることから「ワリ・ソゴの父」とされる。1404年頃にジャワへ来て1419年に没した。</p>
	<p>「ラデン・ラハマト(Raden Rachmat)別名スナン・アンペル(Sunan Ampel)」の父は中東の出身⁴でチャンパの王女との間の子である。ドゥマック(→249)のイスラム教国の建設を支援した。1479年に没しスラバヤ(→140)に墓がある。マウラナ・マリク・イブラヒムに続く指導者でワリ・ソゴの長兄に比せられる。第4代大統領になったワヒド(→455)はスナン・アンペルの末裔ということらしいが。</p>
	<p>「スナン・ボナン(Sunan Bonang)」は②ラデン・ラマハットの息子でトゥバンに布教する。弟子⑥スナン・カリジョゴの師である。④のスナン・ギリとともにアチェ(→257)とマラッカ(→032)でイスラム教の研鑽を深めた。</p>
	<p>「スナン・ギリ(Sunan Giri または Raden Paku)」グレシックで活躍する。親は高貴であるが、事情あって産み落とされて海にながされたが、水夫に拾われて育ったことからジョコ・サムデラ(Joko Samudra 海の子の意味)という名を持つ。旧約聖書モーゼ出生の神話との関係は分からない。ワリ・ソゴの中ではオーソドックス派であり、幼児教育につくした。</p>
	<p>「スナン・ドラジャット(Sunan Drajat)」は②のスナン・アンペルの息子であり、③のラデン・ラハマトの弟である。人格者である。ガムラン音楽を作曲している。</p>

³ <編者註>Slamet Muljana 教授によるとサマルカンド出身で13年間チャンパ王国に滞在した後ジャワに来たとある。

⁴ <編者註>Sunan Ampel はチャンパ王国の華人総代の彭德強ボンタクケン(雲南人)の孫。漢字名は彭瑞和ボンスイホー。

	<p>「スナン・カリジョゴ (Sunan Kalijaga)」はトゥバンの領主の息子である。ドゥマックの大モスク(→249)の建設に貢献した。先鋭的宗教とジャワ文化の調和の功労者である。⁵</p>
	<p>「スナン・クドゥス (Sunan Kudus)」はクドゥスに町を建設してイスラム教徒を広めた。クドゥスはアラビア語で神聖な都市という意味である。</p>
	<p>スナン・ムリア (Sunan Muria)」は Raden Umar Said ともいわれる。⑥スナン・カリジョゴの息子といわれる。ムリア半島の布教に功績があった。</p>
	<p>「スナン・グヌンジャティ (Sunan Gunungjati)」はチルボン(→118)を拠点に活躍した。チルボン王国(→262)の創始者である。</p>

上記は9聖人の定説であるが、ドゥマック王国の創始者ラデン・パタ(→249)をワリ・ソゴの一人に数える説やその他の名前が登場することもある。イスラム教 (or ジャワ) には「9」という数字合わせに意味があるようだ。

713. ワリ・ソゴ伝説

ワリ・ソゴ聖人の逸話の一つを紹介する⁶。スナン・カリジョゴ(前項)は政府高官の息子であるが、悪の道に入っていた。彼が金品を強奪している現場に、スナン・ボナンが現われ周りの物を金に変えてみせた。これを見てカリジョゴは術を授かることを願った。

ボナンは自分が戻るまで川岸を動かないことを約束させた。長年たつて戻ってきたボナンはカリジョゴを川岸に見つけた。そして悪鬼や妖女の誘惑に耐える苦行をへたカリジョゴは自分より立派な聖者になっていることを発見した。

この修業の挿話は「マハーバラタ」に出てくるヒンドゥー的なアルジュナの修業(→948)のコピーである。アッ

⁵ <編者註>Sunan Kalijaga はガンシチャン(漢字不明)という名の Arya Teja =顔英裕ガンエンチュの息子である。ムスリムではなかったようだが、スマランの華人総代となりデマック国の造船に貢献した。(Slamet Muljana)

⁶ <編者註>Babad Tanah Jawi (ジャワ年代記)からの引用。

ラーという絶対神以外に実在の人間を“聖人”として崇めることはイスラムの原理からの逸脱である。イスラム教神秘主義の一つの在り方にイスラム教のジャワ化を見ることができる。

ちなみにスナン・カリジョゴはワヤン(→904)、ガムラン(→910)等のジャワ文化の愛好者、詩人、哲学者としても知られる。スラムタン(→705)という儀礼などのジャワ古来の伝統文化を今日のイスラム風アレンジした発案者もカリジョゴとされている。カリジョゴは伝説的エピソードに満ちておりデディ・ミズワルの主演で『スナン・カリジョゴ』の伝記映画がある。

ジャワ人のイスラム教はワヤンの夜を楽しみながら、ガムランの音に心を癒し、プンドポ様式(→794)のモスクでお祈りをする。イスラム教はジャワ・イスラム教に変容する形でジャワに定着した。ワリ・ソングはそのジャワ・イスラム教の創出者である。

ジャワ人はマホメットと同じくらいワリ・ソングを崇拝している。9聖人は神から授けられた超能力の人であり、奇跡を行って人々を救済したと信じている。死後もワリ・ソングの超能力が信じられ、墓は聖地となり門前町的賑わいである。聖人の墓への崇拝はジャワ・イスラムの特徴である。

一般人のメッカ巡礼は不可能の時代においてワリ・ソングの墓地がメッカの代替地の役割を果たしてきた。特に巡礼月においては今日もワリ・ソングの墓にお参りするジャワ人が多い。ワリ・ソングの墓地はチルボン(→118)からスラバヤ(→140)間のパシシル(→136)にある。一般にイスラム教徒の墓は質素であるがワリ・ソングの聖墓は別である。著名な墓地はマウラナ・マリク・イブラヒムの墓はグレシックにある。墓石はインドのグジャラート産の白大理石にアラビア語で銘が記されている。

ジャワ島へのイスラム布教は交易・商業は一体であり、ワリ・ソングを教祖とするジャワ・イスラム教の教祖集団がサントリ(→630)である。ジャワのイスラム教徒にこれほどの崇拝を受けるワリ・ソングもジャワ人以外は名前さえ知られていない。

ワリ・ソングの系譜は NU(→419)に引き継がれている。インドネシアのイスラムは《ワリ・ソング》と《非ワリ・ソング》の対立軸にあるという視点も銘記したい。

714. 異端の宗派

インドネシアにもたらされた初期のイスラム教はスーフィズム神秘主義系のものであり、タレカット⁷といわれ、ジャワ固有の神秘主義に接ぎ木をされたともいえる。

マレー世界へのイスラムの布教⁸にスーフィズムが果たした役割は大きく、すでに 15 世紀末にはマラッカにスーフイー(神秘主義者)が活躍しているが、教団組織は 17 世紀以後メッカ巡礼者によって導入された。

イスラムが土着の宗教伝統と混合しているのはインドネシア全土の共通の現象であるが、特にジャワではワリ・ソング(前々項・前項)による布教段階からジャワ的要素が顕著である。アチェ、ミナンカバウ、スンダ、マドゥラ、ブギスがイスラム教として比較的純粋であるのはジャワと比べると混合すべき土着要素が弱かったからで

⁷ タレカット(tarekat)はアラビア語のタリーカ(tariqa)のマレー語である。タリーカの語源は「道」を意味するが、特定のスーフイーの集団を指す。

⁸ 東南アジアへのイスラム布教はスンニ派であった。従ってインドネシアのイスラム宗派はスンニ派に属するが、西スマトラ州の海岸部のミナンカバウ人にシーア派が見られる。シーア派の祭典タブック(Tabuik)が有名である。〈編者註〉Slamet Muljana 教授は 12 世紀にシーア派がアチェに伝わり、16 世紀まで中部ジャワと西スマトラではシーア派が主流だったと述べている。

あろう。

しかし布教過程でイスラム教の過度の現地化に対してはオーソドックス派からの批判があったことも事実であり、イスラム教のジャワ化に歯止めもあった。シティ・ジェナル (Siti Jenar) はイスラムのジャワ化を図ったが余りにも逸脱しているとして裁判にかけられ処刑されたと伝えられる。

異端宗教とされる「サミン運動」は中部ジャワ州ブロラ (Blora) 県の農村に 1859 年頃に生まれたスロンティコ・サミン (Surontiko Samin) という一農民によって始められた。オランダ植民地支配は倫理政策(→283)が導入される変動期であった。信徒は 3000 人に拡大し、税金の支払拒否したことから反乱を企てているとして 1907 年に指導者8名はジャワ島から追放されたが、運動は第二世代に引き継がれた。

サミンは“アダム教”と名乗って宗教活動を行った。生産と夫婦の性的結合を重視し、支配者に敬語を使わないという奇妙な振る舞いで知られる。民族主義者によって原始共産主義という評価もされた。体制側の厳しい監視下にあつて分断されながらも農民によって維持され今日も信者はいる。9 月 30 日事件(→384)では共産党シンパとして徹底的に弾圧された村もある。



近年、インドネシアの宗教界では「アフマディア (Ahmadiyah) 派」問題がある。アフマディア派は 1839 年にインドのパンジャブで「ミズラ・ガラム・アマッド (Mizara Ghulam Ahmad)」が唱えた宗派である。ミズラは自身を預言者とし、その信奉者がアフマディアといわれる。イスラム教はマホメット以降の預言者を認めないためアフマディア派は異端とされている。パキスタンでアフマディアは国の独立に寄与した勢力であったが、1974 年、パキスタン政府はアフマディアはイスラム教徒でないことを宣言した。

インドネシアでは最近になってパキスタンと同様にアフマディア派問題がクローズアップされてきた。イスラム過激派(→751ex)がアフマディア派を“非イスラム”として襲撃する事件が相次いでいる。ユドヨノ大統領もイスラムの人気取りのためにアフマディア派を非イスラムとする宣言を行うものと見られる。

宗教勢力への政治的妥協はより悪い結果を招くという歴史の教訓が思い出される。

715. キリスト教との併存

ヨーロッパ人とともにキリスト教は東南アジアにもたらされた。当初ポルトガルやスペインはキリスト教布教に熱心であったのに対して、オランダは宗教には距離を保っていた。そのオランダが収奪だけが植民地ではないとキリスト教布教に若干熱心になったのは倫理主義政策(→283)以降である。

インドネシアにおけるキリスト教布教先は次のグループ分けになる。①スマトラ島北部のバタック人、②東インドネシアのアンボン人とマナド人等、③ジャカルタなど都市の華人社会、インテリ層、④ジャワ農村のアバンガン、⑤辺境地のアニミズムの諸民族である。

①スマトラ島のトバ・バタック人(→607)の改宗はドイツ系宣教師の熱心な布教の成果である。ただし布教にきた最初の二人の宣教師は食べられるという犠牲は払っている。もちろんキリスト教改宗後は食人の風習はなくなった。

キリスト教徒の村とイスラム教徒の村が隣り合えば摩擦が生じると懸念されるが、“猪”という妙な媒体

を通して共存している。猪が多いと作物に被害がでる。イスラム教徒は猪(野豚)を見ることさえも忌避するから、猪が跋扈(はつご)をきわめる。隣村がキリスト教徒の村であれば、猪を食料のため退治してくれから有難い存在である。

- ②西から浸透してきたイスラム教が、東インドネシアに及ぶ以前に香料を求めてヨーロッパ人と同時に宣教師も到着した。マナド(→208)、アンボン(→225)、フロレス島(→218)がキリスト教の地盤である。アンボンでは香料の栽培と取引のため人の移住が多く、移住民社会の共通宗教としてキリスト教が定着した。当初は原住民であってもキリスト教徒は法的にはヨーロッパ人と同等とされ、官吏や兵士の採用が優先された。

独立後、移住でイスラム教徒が増加して東インドネシアの宗教バランスが崩れ、各地で宗教対立(→737)が引き起こされるようになった。

- ③オランダの植民地支配の中枢地であった遺産としてジャカルタのような大都会にはかなりのキリスト教徒がいる。

- ④ジャワ農民はアバンガン(→631)といわれる敬虔でないイスラム教徒が多いが、同様に形が間的なキリスト教も受け入れられている。ジャワの農村にはイスラムの《モスク》と《キリスト教会》の併存の風景がみられる。

- ⑤既成宗教のまだ入っていないダヤク人(→624)、トラジャ人(→618)、イリアン高地人(→627)の諸民族はアニミズム信仰であった。熱心な布教もさることながらキリスト教への改宗が多いのは“豚”を飼えなくなる点がイスラム教のハンディであろう。

インドネシアのキリスト教徒は1千万人で人口の7～8%になる。プロテスタントとカトリックは2:1の比率でプロテスタントが多い。キリスト教系のジャーナリズムが有力であること、知識層などの有力者により浸透しているため、人口比以上の勢力がある。インドネシアがイスラム化に傾斜すればその反動としてキリスト教徒の反イスラムが誘発されることが近年の宗教紛争の背景である。

716. カトリック

首都ジャカルタの中心地にカトリックの大聖堂がある。植民地時代にオランダがオランダ人のために建てたものである。バンドン、スラバヤ、マラン、スマランなどオランダ人が多く居住した都会にはカトリックの教会がある。オランダ人が去った後も教会が維持されているのは少なからぬインドネシア人の信者がいるからである。インドネシアのクオリティ紙とされるコンパス紙のオーナーはカトリックである。

インドネシアへのカトリックの歴史は16世紀のポルトガル時代(→270)にさかのぼる。フランシスコ・ザビエルはマラッカから1546年アンボン(→225)を経てハルマヘラ島(→230)、モロタイ島(→231)まで出かけている。今日ではインドネシアの僻地である両島がザビエルを引き寄せた誘因はやはり香料だろうか。その後、彼は1549年鹿児島、1551年京都、1552年中国で客死まで一連のカトリックの東洋布教の旅の生涯であった。

アンボンは今日もキリスト教徒が多いが、オランダ時代にプロテスタントに改宗したのでプロテスタントの方がカトリックより優勢である。

ポルトガルに代わったオランダはキリスト教国であるが、カトリックのスペインの圧政から独立したという経緯からもカトリックに冷たかった。ただしオランダ南部には現在も多くのカトリック教徒が居住している。

19世紀中頃、ポルトガルはオランダにフロレス島の商権もろとも譲渡した。後にオランダが倫理政策(→283)でキリスト教の普及活動をバックアップした際、フロレス島に既にカトリックが普及している実績をふまえカ

トリックの地盤にしたのであろう。従ってフロレス島のカトリックにはポルトガル時代のララントゥカ系とオランダ時代になってからのエンデ系の2系統があるようである。

フロレス島民の宗教は90%近くがカトリックである。彼らは一見カトリックのように見える、またそのように振る舞う。しかし住民の心はアニミズムに支配されているという。カトリックの儀式が終わると住民は牧師を除いて自分だけのアニミズムの宗教儀式⁹を取り行うという。

現地人の神父の任命式にはフロレス伝統のイカット(→928)のガウンを着るようにカトリックは現地化している。実は外見のみならず内面においてもフロレスのカトリックは見せかけであり、彼らはアニミズムに基づく独自の儀式を伝えている。カトリックの神父も土着文化へは不干渉の方針であり呼ばれない限り村にも入らない。

インドネシアのカトリックで特記されるのは東ティモール(→222)である。東ティモールの分離独立の理由に宗教問題がいわれたが、東インドネシアにはフロレス島のようにカトリックの島があるように、宗教の教義の問題ではない。

東ティモールがインドネシアに併合された間もローマ法王庁は東ティモールをインドネシアとは別個の組織下におき、インドネシアの東ティモール併合に反発し宗教が政治的な存在であった。

⇒218.カトリックの島

717. プロテスタント

パンチャシラに基づく公認宗教はイスラム教、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥー教、仏教の5宗教である。プロテスタントとカトリックはキリスト教ではあるが、インドネシアでは別の宗教という扱いになっている。ちなみにインドネシア語のキリスト教という意味の「クリステン(Kristen)」はプロテスタントのことでカトリックは入らない。

オランダはもともと宗教に淡泊な国民である。地元の王国はスペインやポルトガルの宗教的な灰汁^{あぐ}の強さに辟易^{へきえき}していた。オランダが歓迎はされなくても嫌悪されなかった^{ゆえん}所以は徳川幕府の鎖国政策からも窺える。

当初、オランダの植民地政策は原住民の宗教に関知しないという立場をとってきたが、20世紀初めから植民地経営に倫理主義政策(→283)を唱えるようになり、その具体策の一つとしてキリスト教布教の支援があった。別にインドネシアの住民が宗教に餓えていたわけではない。オランダがこれまで精神的な問題を放置していたという反省からの自己満足にすぎない。

インドネシアのプロテスタントの分布が片寄っているのは布教時の地域別事情による。主要地域はスラウェシ島のミナハサ地方(→207)、トラジャ地方(→203)、ポソ湖(→206)、スマトラ島のバタック人(→607)である。ガムラン楽器(→910)伴奏で“賛美歌”を歌っているようにそれなりの現地化を行なわれている。

スマトラ島の宗教分布ではイスラムの強いアチェ人(→604)とミナンカバウ人(→609)の間のバタック人がプロテスタントである。オランダがバタック人への布教に肩入れをしたのはアチェ人とミナンカバウ人のイスラム戦線の分断が目的であったと勘繰られている。

バタック人の布教には次のようなエピソードがある。最初のバタックへの宣教師は食べられた。それでもやってきた宣教師は殺されなかったが、歯を全部抜かれた。宣教師は総入れ歯にして再びバタックを訪れた。総入れ歯を見たバタック人は歯が再生しているのを奇跡と認めた。バタック人がキリスト教に改宗したのはそれ以降という。

⁹ ⇒青木恵理子「南島のカトリック教徒」民族学 NO.57

バタック人は支配者の宗教としてキリスト教を警戒しており改宗者は一部に過ぎなかった。日本の占領でヨーロッパ人の宣教師が追放された後、バタック人の宣教師によって本格的に改宗した。バタック人のインドネシア中央での勢力が人口比以上であるのはミッション学校の教育の成果であるという説がある。

9月30日事件(→384)以降、無宗教者⇒唯物論者⇒共産党員として無宗教者は迫害をうけたためキリスト教はむしろ隆盛になった。イスラム教に距離を置く人々がキリスト教に改宗した。華人の改宗者が相次いだのもこの頃であろう。

スハルト大統領のパンチャシラ体制(→366)の中でイスラム勢力を牽制するカウンターパワーとしてキリスト教の存在はそれなりに評価されてきたが、スハルト体制崩壊後はイスラム主義の復権がインドネシア各地、特にアンボンやスラウェン島でキリスト教徒を挑発して騒動(→737)を起こしている。

718. 仏教の系譜

インドネシアの仏教には二つの側面がある。一つはインドネシアへ渡来した先行文化としての8世紀に仏教の洗礼を受けた。もう一つは近年の仏教の復興である。

東南アジアにインド文化が浸透し仏教は東南アジア全域に広まった。その後、島嶼部はイスラム教に改宗したが、大陸部のタイ、ビルマ(ミャンマー)、カンボジア、ラオスは今でも仏教国である。これらの仏教は小乗仏教(あるいは上座仏教といわれる)である。その特徴は出家者のサンガ¹⁰を中核とし、出家者でない者は信者ではない。しかし出家者への戒律は厳しく、例えば僧の妻帯は一切認めない。

これに対して中国、朝鮮経由で日本に招来された仏教は大乗仏教といわれる。お釈迦さんの座は大きく解放されており、出家者でなくても仏教への帰依が認められる。

当初インドネシアに伝播していた仏教は大乗仏教であり、今日の東南アジアの小乗仏教とは別系統になる。インドネシアの仏教遺跡ではジャワ島のボロブドゥール(→126)が有名であるが、これも大乗仏教の遺跡である。スマトラ島にも多くの仏教遺跡が散在する。北スマトラのパダン・ラウス(→090)は13~4世紀頃まで大乗仏教が栄えていたことを示している。遺跡から密教の要素も窺われる。

東南アジア各地¹¹でも当初は大乗仏教であったが、スリランカの小乗仏教が取って替わった。インドネシアに痕跡程度ほど現存している仏教は東南アジアの現今と同じく小乗仏教である。タイやミャンマーの仏像は寢像が多い。東南アジアではお釈迦さんもシエスタ(昼寝)が好きらしい。

仏教に関するもう一つの側面である近代インドネシアの宗教現象は華人の宗教としての仏教の存在である。インドネシアの仏教復興は華人が中心であった。その先人としてクウェ・テックホイ(KweeTekHoay1886-1952)が挙げられる。

しかし今日的な意味を持つのは1965年の9月30日事件(→384)である。同事件を契機とする国内騒動で共産党はインドネシアから根絶やしにされた。大衆に共産党が嫌われた理由の一つは共産党の無神論である。

中国系住民(華人)の宗教は特殊であり、その中味は仏教、儒教、道教が一体となったものである。9月30日事件以降は無神論者(共産党員)でない証として仏教信仰を届けるようになった。華人本来の道教・儒教

¹⁰ サンガ(samgha)は集団、群、組合を意味するサンスクリット語である。上座部仏教では出家者集団のみをサンガという。

¹¹ <編者註>インドシナでもベトナムは大乗仏教である。

は認められていなかったからである。現在のインドネシアの仏教信者は2～3百万人という。イスラム教嫌いのジャワ人のクバティナン(→707)信仰者が届け出だけは仏教徒とする例もあるらしい。

シヤカの生まれた日とされている「ワイサク(Waisak)日」はインドネシアの国の祭日であり、この日にボロブドゥール遺跡に仏教徒が集まって儀式を催す。参列者は華人が多く、僧はタイから招かれているらしい。

松本亮著『ジャワ夢幻日記』に中部ジャワで「ナムミョウホウレンゲキョウ」を唱える日蓮正宗のインドネシア人信者との出会いが記されていた。

719. バリ・ヒンドゥー教

ヒンドゥー教とはブラフマン、シバ、ヴィスヌの3神を主上神とするインドの民族宗教である。神学としてのヒンドゥー教は深遠ではあるが曖昧^{あいまい}なところもある。インド人の生き方がヒンドゥー教であるという定義もあるくらいである。

バリ人の宗教であるヒンドゥー教は人々の生活に根を下ろしている。しかしインドの詩人タゴールがバリ島を訪れて、バリのヒンドゥー教を見聞して「インドらしくはあるがインドではない」と言ったようにバリのヒンドゥー教はインドとは別のものである。

インドからのヒンドゥー教はジャワ島を経由してバリ島に伝えるられた。元からバリでは太陽や水や大地は豊穡の源として崇められ、海、山、湖、ブリンギンの樹(→050)、洞窟などあらゆる自然の霊が畏れられ崇められていた。インドからもたらされたヒンドゥー教は土着信仰のアニミズムを排除するのではなく、それと融和していった。

特にバリ・ヒンドゥー教はバリ人が古来から崇める山への信仰と重層になっている。従ってインドのヒンドゥー教とバリのヒンドゥー教の間にはキリスト教のカトリックとプロテスタント以上の差があるといわれる。ヒンドゥー教はこの美しい島で昇華し、インドとは別もののバリ・ヒンドゥー教になったといえる。

インドネシアは一神教であるイスラム教徒が圧倒的多数である。インドネシア独立の際にはイスラム教国家の是非を巡る国体論争が行われ、收拾がつかなくなった。そこで後のスカルノ大統領の提案した全民族を結合するインドネシア建国の理念であるパンチャシラ=5原則(→365)の第一は「最高(唯一)神への信仰」である。これはインドネシアの全民族の多様な宗教を包含する最大公約数である。

「唯一神への信仰」からすれば多神教のヒンドゥー教は矛盾する存在となり、初めは公式宗教として認知さ



ジャガトナタ寺院

れなかった。そこでヒンドゥー教側でも「サン・ヒャン・ウィディ(San Hyang Widi)」という最高神を担ぎ出して諸々のヒンドゥーの神々はその下にあるか、またはその変身であるとした。デンパサールの中心に建てられた「ジャガトナタ(Jagatnatha)寺院」はヒンドゥー唯一神の社である。しかしこの神学はヒンドゥー教も一神教であるという理論武装¹²のためのつじつまあわせの感は否定できない。

1962年にヒンドゥー教は公認宗教となりブサキ寺院(→180)の大祭にはインドネシア政府が財政支援を行った。このことはバリのインドネシアへの従属でもあった。

¹² ⇒鏡味治也『政策文化の人類学』

1965年の9月30日事件ではイスラム教徒に扇動された共産党員狩りがインドネシア中を荒れ狂い、バリでも8万人の犠牲者を出した。邪神をも崇めるヒンドゥー教徒は共産党員と紙一重の不信の徒としてイスラム世界から異端視される中で、バリ人は宗教に距離を置いた人を共産党一派と見なす浄化作用で身の証を立てたのであろうか。

インドネシアの宗教統計によると中カリマンタン州にヒンドゥー教徒が大勢いることになっている。ダヤク人でカハリガン(→190)という精霊信仰の者は統計的にヒンドゥー教に包含されているからである。⇒644.寺院との結びつき

720. 結婚のハードル

イスラム教では結婚(婚姻)は宗教の領域であり、インドネシアでは宗教省が管轄¹³する。ある映画のストーリーであるが諍^{いさか}いが高じて離婚を決意して宗教事務所へ駆け込んだ若夫婦は世故たけたキヤイ(→870)に適当にあしらわれて追い返された。結局、離婚騒動は時間の経緯とともに元の鞆^{まが}に戻るというのが大筋である。役所の窓口であればこのような粋な計らいはないだろうと見入った。婚姻を国が管理することは世界の大大勢であるが、その分、人情味はなくなっているのだろう。

スハルト大統領が婚姻法(→421)によって結婚を宗教から国家の領域に取り込もうとしたが、イスラム側の執拗な抵抗にあい、1974年に両者の妥協のような形で決着した。現行の法制度ではイスラム教徒は法によると宗教による結婚を選択することができる。併せて婚姻は国の機関へ届けることで成立が可能となった。

イスラム法ではムスリム同士の結婚が望まれているが、男性は経典の民といわれるキリスト教徒、ユダヤ教徒であるならば非ムスリム女性との結婚が可能である。一方、女性はムスリム男性との結婚しか許されない。この差は結婚後、夫は妻を改宗させられるという理屈からであるが、逆はない。従って日本人男性がムスリムのインドネシア人女性と結婚する場合はイスラムに改宗せねばならない。

ムスリムに認められている複数妻については過去にはスカルノ大統領の女性関係(→442)は有名であったが、その後のインドネシアの指導者はスハルト大統領以降、妻は一人である。2001年メガワティ大統領当時の副大統領ハムザは二人妻である。

1983年、多分、スハルト大統領夫人の差し金と思われるが、大統領は婚姻法を精神を尊重し国家公務員(国営企業を含む)は一夫一婦制を厳守する旨の大統領令¹⁴を出した。一般的に健全な中産階級は一夫一妻が支配的であり、複数の妻という特権は自営の富裕階級か、むしろ経済的に余裕のないはずの下層階級に多い。

ジャワの伝統の結婚式は宮廷の伝統舞踊の姿と同じで花婿は上半身は裸であり、花嫁も乳房から下を覆っているだけである。もちろん金銀のきらびやかな装身具はつけている。イスラム教への改宗後は肌を出すのは禁じられるようになったが、ジャワの古来の風俗が結婚の正装として残っていると考えられる。しかしジャカルタのホテルで見られる今様の結婚式では長袖、長ズボンがフォーマルな服装になってきた。

¹³ 宗教省は本人と立会人のもとに「akad nikah」という結婚契約書を発行する。イスラム教では結婚は契約と見なしている。本人から申請があれば四人までの妻に akad nikah が発行される。

¹⁴ 公務員は二人目の妻と結婚する場合は上司の許可を得なければならない。しかし上司は許可をしてはならないという指導があるので国家公務員は複数の妻は持てないのが実態である。

ジャワの結婚式では花婿は生卵を踏み潰し、花嫁がその足を洗う¹⁵というのはイスラムの風俗らしい。卵の方はとにかく花嫁が花婿の足を洗うのは男に対する生涯の服従の証として受け取られている。女性解放の先駆者であるカルティニ(→343)はこの足洗いを行わないことを条件に結婚に応じた。

現実のインドネシアでは偉い將軍の夫婦同伴の姿でも奥方が堂々と見える。その公私にわたる活躍ぶりは結婚式で夫の足を洗ったとは信じられない。

721. 葬儀と墓地

日本の場合、葬式と宗教の関係は密接である。しかしイスラム教の場合は仏教、キリスト教と比べ葬儀宗教としての様相は少ない。

死が近づくとイスラム教徒は信仰告白することで天国行きが保証される。臨終には生前のメッカ巡礼の際に持ち帰ったザムザムの聖水(→010)をふりかけることが望ましい。

遺体は丁寧に洗われた後、新しい白い布で包まれねばならない。商店から白い布が不足すると食料不足と同じくらい社会不安を引き起こす。スハルト大統領のティエン夫人(→451)の葬儀の写真で棺に入れられた遺骸が白い布に包まれていなかったことから“隠れキリシタン”であった、との噂が再発した。

熱帯では死体の腐敗も早いので、葬儀は一般に取り急いで行われる。普通は遅くとも死んだ日の翌日である。ムスリムとの付き合いで葬儀は飛び入りだけに大変である。万難を排して参列¹⁶しなければならない。

イスラム教徒の葬式は参列者はびっくりするくらい多いが、式そのものはあっけないほど簡単である。コーランの一節が唱えられ参列者は厳粛な顔をしている。近親者も泣き悲しむことはない。死して天国へ行くというのは神の意志である。したがって過度に死者を悲しむことは神の御心にケチをつけるということになる。

棺^{ひつぎ}はモスクに持ち込まれ、葬儀礼拝の後、徒歩で近親者によって運ばれる。葬列の行進はかなり足早であり、棺運搬の車の交通は最優先である。中東などのムスリムの葬式で女性は墓地に行かない。しかしインドネシアでは女性が墓地まで行くことは珍しくない。

墓地の遺体は右脇を下にして顔は横にする。顔の向け先はいわずと知れたメッカの方角である。地上の墓石もメッカに向かっている。

イスラム教徒の死骸は必ず土葬されねばならない。いかなる理由があってもイスラム教徒は火葬にしてはならない。イスラム教徒にとって火葬とは地獄へ落ちた者が処罰される地獄の劫火^{こっか}である。砂漠の灼熱より熱い、という脅し方がアラビア生まれの宗教らしい。

墓地はモスクの一角にある隣接地であることが多い。埋葬の際、コーランの一節がつぶやかれるだけである。イスラム教徒の墓そのものは畳一畳のコンクリートで囲まれもので、目印の木の棒がある程度の非常に質素である。インドネシアに限らず全イスラム教徒に通じる。フリ・ソング(本章)の墓だけは例外的に立派である。

イスラム教徒にとって個人の墓であり、家族の墓という概念はない。神との契約はあくまで個人ベースであ

¹⁵ ジャワ人の結婚は複雑な儀式があり、花婿が生卵を踏み潰す儀式はウィジ・ダディ(wiji dadi)といわれる。卵の黄味は女性を表し、白身は男性を表すことから男女の交わりをも意味する。クンプル編「ジャワ更紗の旅」

¹⁶ 9月30日事件の犠牲となった將軍達の葬儀が10月5日に行われた。スカルノ大統領は不測の事態を恐れて参列しなかった。將軍達殺戮に対するスカルノ大統領の言動が深刻でなかったことに加え、葬儀に参列しなかったことが大統領の事件関与の疑いを深め、国民の大統領への人気は急落した。もしスカルノ大統領が万難を排して葬儀に参加し、將軍達殺戮への怒りを露にしておればインドネシアの政治の流れは変わったかもしれない。このことをスカルノ大統領は後悔しデヴィ夫人への手紙に記しているらしいが、デヴィ夫人の作り話かもしれない。

る。

インドネシアには民族固有の文化として葬儀の伝統を守っている民族がいる。スラウェシ島のトラジャ人(→619)の大葬儀、ヒンドゥー教のバリ人の火葬(→651)、スンバ島の巨大石墓(→700)、バリ・アガの風葬(→661)などが知られている。イスラムとは異なる宗教の信仰心の表れである。